

Lettere

— DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo —



笹川日仏財団
ニューズレター
Vol. 4 No. 4

今年で2回目を迎えた青春白樺美術館財団主催による「フランスからの美術留学生研修奨学」が、この9月から今年も始まった。研修者は3カ月間、山梨県北巨摩郡長坂町の青春芸術村に滞在して日本を知り、芸術活動を深めることで日仏文化の交流を果たそうとする目的で始まった試みだ。

その中から審査によって3名、9月に2名、12月に1名に迎えた。うち2名の作対し、帰国前の12月11日、16日の5日間、銀座の吉井画廊で会が開催された。

村内にある青春白樺美術館は、美術を縁に、人類の平和と愛と喜びの運動を日本にも起こしたいとした武者小路実篤ら白樺派の夢を実現すべく、現理事長の吉井長三氏が1983年に設立。宿泊施設になった美術館に隣接するラ・リュージュ(フランス語で「蜂の巣」の意)は、パリの画家達が築いたパリの集合アトリエの精神を蘇らせたもので、内外の芸術家に創作活動の場を提供してきた。今年も、昨年の応募者の2倍に近い60名ものアーティストの応募があったが、



フランスの若きアーティスト支援のための美術研修

紙など素材にこだわりの持つてオブジェを手掛けていたラファエル・ロジェ・ドウ・ヴァレ(31)さんは、今までの作品とは一変して、卵の殻に顔を描いた小品を出品。それは神楽や能の面に出会った影響によるという。また安部公房や太宰治を読み、舞台衣装から音響まで演劇全般にも関わっているパスカル・ランデ・ポペール(30)さんは、短冊型の水彩画を何枚も続き絵のように画廊の壁を飾って展示した。

両者共通した研修の感想は、ラ・リュージュの周囲が、自然溢れた環境だったため、何より自分自身を振り返ることのできた場となることが多かった。またもう一人のガブリエル・スバルヴァセ(30)さんは、マルチメディアによる表現活動を行なってきたが、来日以来電車の車窓からの景色をビデオに収めているという。作品は、来年2月に吉井画廊で発表される。尚、次号「ニュースレター」では、彼らのインタビューなどを交えて今回の研修の様相を詳しく紹介する予定である。今回の展示会も、街の一隅ではあるが、日仏文化交流の場となって光を当てていた。師走の銀座、足早に通り返る日本人の足を、ショーウィンドウに展示された怪しい卵の殻の面々がフト立ち止まらせるのである。



IT時代のファッション・ビジネス文化の 求められる技術、経済デザイン、文化の バランス

変革が淘汰か。産業革命以来の大改革をもたらすといわれる「IT(情報技術)革命」。日本の産業全体がITに遅れをとっているとされているが、特にファッション産業は感性の産業のためか、その遅れは甚だしい。ITを有効活用できなければ日本のファッション産業自体が淘汰されていくのではないかとの危惧を持って『IT革命とファッション・ビジネス』が10月27日と11月14日の両日IFIビジネス・スクール新校舎移転記念の特別プログラムとして、両国の新校舎で開催された。ファッションの先端を行くフランスとアメリカのビジネススクール代表者を迎え「IT革命が求める新しい人材像」をテーマに行なわれた二日目を取材した。



IFIビジネス・スクール学長
尾原 蓉子女史

このプログラムは、ファッション業界が業界のために日本で初めて設立させたIFEビジネス・スクールの企画によるものである。二日目の焦点は何より教育だが、IT時代に突入した大変革を、教える側にもっと敏感に反応してもらいたいという切実な思いを持って開催された。出席者は、産業界を代表してIBMアジア・パシフィックプレジデント兼㈱日本IBM代表取締役会長、北城 悟太郎氏。教育界からは、IFM(フランスモード大学院)学長、パスカル・モラン氏、FEIT(ニューヨーク州立ファッション工科大学)理事、エドワード・ジョーンズ、世氏の三氏だ。プログラムの中心は三氏の講演だが、ここでは特にモラン氏の発表に焦点を絞り、レポートした。そこで最初に浮き彫りとなった世界のファッション状況から始める。

新しい消費者の登場

「この数年間ヨーロッパ市場特にフランスでは今までにない変化が生まれています。それは一つのブランドに凝り固まらず、たとえばチーフなものやブランド品、または様々なブランドを取り入れてミックスしたライフスタイルをとり始めたことです。さらに関連して、カジュアル(Casual)、コンフォート(Comfort)、クリエイティブティ(Creativity)の3つのCを求めています。快適で着易く、それでいてオシャレといったイメージです」

IT時代のB2BとB2C

モラン氏はまたIT革命による変化の一つに、何よりB2B(企業間取引)の増大と加速化を掲げた。「それによってB2Bポータルも当面は増えていくだろう。しかしそれは一時的なものでやがては集中化の道を辿る」と予測した。日本ではまだ認識の低いB2Bポータルに対して、一歩先んじた発言を示唆したのである。

さらにB2C(企業対消費者取引)についての将来も述べた。「アメリカ市場ではコンピュータの次に買われているのが繊維アパレルです。ネットビジネスでスタートしたアマゾン・ドットコムも、結局は店を持つ時代になりました。どれほどネットショッピングがさかんになっても、店へ行っただけで手触ってみたいという人間の根本的な欲求は残ると思います」

「これは日本も含め世界的な傾向だとモラン氏は言う。今回の来日で百貨店を視察したときも「ユニクロ」が目についたとモラン氏。デザイン性よりもその価格の安さ、新しい歴史の「ページ」と思わせるほどの驚きがあったという。この傾向は、不動産の地位にあったオートクチュールなどの市場に価格変動の動きが出てきていることから見て取れ、これまでのブランド忠誠心というものが大きく変化していることが伺えるのである。

また香水や化粧品業界では、ネットによるオンライン取引が開始されているが、市場におけるその割合は従来の郵便によるカタログ販売に近付きつつある現状を紹介。顧客の層はまだ異なっても将来一つの収束に向く可能性は大きいとした。

しかしファッション産業でもスタートしたネット事業で、すでに様々な問題点が浮き上がっているのも事実である。その事例と問題点を提供側の立場からモラン氏は語った。「B2Cには、Boo.comなどITをつまみ取り入れて機能する新しい担

変化できる者だけが生き残れる

変革の時代だからこそ私たちは真のプロフェッショナルの実力を持たなければならぬのだ。

それでは、送り手のプロとは何をもってプロというのだろうか。そして求められる人材とは、フランスではビジネスマンのファッション感覚はカジュアルな方向に変化してきている。それを踏まえ、ネクタイ業界の人々が将来に対する不安として夜も眠れない状況にあることをモラン氏は紹介してこう言った。「すでに今までにない新しい行動様式、新しい洋服の在り方が登場しています。それに対応するには、若い人々のものの感じ方がいかに自分たちと違ってきているかを把握することから始めなければなりません」

文化と経済のバランス

それでは、このような現状に対してフランスのIFMでは、どのような教育を趣旨として実践しているのだろうか。学校設立は単なるアカデミズムではない業界始動によるため、モラン氏の話の内容はあくまで実践につながる教育の必要性が強調された。

「インターネットは何も新しい技術でも何でもありません。昔からあったのです。しかしそれによって何をやるかが問われてきます。それはコーディネーション。様々な分野、人々、技術、市場がコーディネートされることで新しい付加価値が生まれてきます。また遠隔学習が可能となったことで、さらなる可能性も加わりました」



IFMアジア・パシフィックプレジデント兼
㈱日本IBM代表取締役会長
北城 悟太郎氏

上司が部下にどうやって火をつけるかが大切ですよ」と言葉で結んだ。しかしITに関する理解不足からなのか、困惑からなのか、まだまだ会場と壇上の熱の差を感じずにはいられなかった。

このプログラムへの出席も学校関係者に望んだが、結果的には期待した半数以下。このことで、閉鎖された日本の教育機関

「ITによって自由を得る反面人々の孤独感も増すでしょう。私はIT革命は孤独のデモクラシーとも呼んでいます。その変化に即した高等教育を受けられる人はいいいですが、チャンスに恵まれない人もいます。また組織など枠組みがあって安心する社会もあるのです。この点は日本とフランスは似ているではないでしょうか。進化をすることは大変にいいわけですが、同時に精神的な背景も大事に守っていく必要がある。そういった意味を含んで、人々を本当に幸せにするための道筋をつくるのが、これからの学校の大きな役割であり、課題でしょう」



IFM / フランス・モード大学院学長
パスカル・モラン氏

「バルザックとアパレル」という出版物を刊行予定だという。

後半は、主催者であるIFEビジネススクールの尾原蓉子女史が司会役を勤めて、パリスファッションが行なわれた。学長は、そのデイズセッションを「教育はファイアリング。企業の



IFM / フランス・モード大学院 (Institut français de la mode)
通産省、業界の支援を受け1986年設立。経済傾向を分析する調査、研究もさかん。ニューヨーク、ミラノ、ロンドン各校との交流もある。
<http://www.ifm-paris.org/>

FIT / ニューヨーク州立ファッション工科大学 (Fashion Institute of Technology)
1944年、業界リーダらによって設立。当初は業界での就職を目的としたが、年月とともに成長。専門領域を上げ、国際的にも有名に。
<http://www.fitnyc-suny.edu/>

IFI / ファッション産業人材育成機構 IFIビジネス・スクール (Institute for the Fashion Industries)
大卒以上を対象とした日本初の業界始動による学校。1992年、通産省、東京都、墨田区、業界380社の出資支援によって設立。
<http://www.ifi.or.jp/>

新しい銀行像に 絶対的なモデルはない

パリクラブと日仏協会、日仏経営学会の共催によるパネルディスカッション「新時代の銀行像…日仏の視点」が12月5日、東京恵比寿の日仏会館ホールで行なわれた。

「銀行は死んでしまったのか」銀行員として欧州に駐在経験を持つ司会の九州国際大学教授の河野誠之氏のこの一言で始まったが、21世紀を前に経済、産業など大きな構造変革を迫られているのが現在。大手スパーなどが決済中心の新しい銀行業務を開始している中で、果たして従来の銀行が顧客変化などに対応しきれていないのか。その現状と課題などを検証し、日仏の新時代における銀行像を探っていこうというものである。

A F P 極東特派員東京支局長フィリップ・リエス氏からは、80年代初め、フランスの銀行は他のヨーロッパ諸国はもろろアメリカと比べてさえも、世界のトップで国際進出を果たしていたという話題を皮切りに、これまでの銀行の歴史が語られた。しかし、新しい左翼政権の出現によって1982年に銀行が国営化され、すべての金融機関が硬直化していききました。銀行自体には世界進出の野心があつて

も、その活動のための資産を与えない政策がとられたため競争力を失っていったのです」

また国土庁官房長、パリクラブ常務理事船橋晴雄氏からは、この10年間の日本の金融界の苦しい状況が起つた原因が、日本人の「東西冷戦の終焉という意味の認識不足からきている」と、行政の立場から反省をこめて語られた。

またクレディリヨネ証券東京支店支店長、ジャン・フランソワ・デロッシュ氏、日本電気㈱財務主幹太田研一氏、両氏からは、電話銀行や電子銀行、ノンバンクの参入など現在金融界で起こっている実情が語られた。そしてフランスの15年前に起こった現象が現在日本で起こりつつあることをリエス氏は指摘。その体験から、「新しい参入者が来ても決して恐れることはありません。かえって彼らは従来の銀行に新しい方向性を示してくれました。侵入者は針のようなものでしたよ」



左から：九州国際大学教授／河野誠之氏、クレディリヨネ証券東京支店支店長／ジャン・フランソワ・デロッシュ氏、A F P 極東特派員東京支局長／フィリップ・リエス氏、日本電気㈱財務主幹／太田研一氏、国土庁官房長、パリクラブ常務理事／船橋晴雄氏

太田氏も「異形種の参入があることは、金融が成長産業の可能性を持っているからです。総合メーカーから得意分野を持つなど新ビジネスモデルの提供さえすれば、継続的成長は可能です」と銀行の将来に対する展望を述べた。

四氏の講演後は会場からの質疑応答にあてられたが、生保事業を始めたフランスのある銀行の利便性を掲げた日本人の質問者に対するリエス氏の返答は、今討議の一つの結論ともなったのである。

「巨大化したり、何でもみつかる銀行を私は懐疑的に見ています。時代の流行、景気などによるため、絶対的なモデルはなく、価値もありません。それらを求めるのではなく、むしろ環境変化に適応する柔軟な対応こそこれからの銀行に最も求められるでしょう」

変化の時代ともなれば、先へ進むことばかりを考えがちな日本人だが、アメリカ力流市場絶対主義に陥ることなく、伝統を踏まえて自らが養ってきた自信という財産の価値をも一度振り替えることも必要なのかもしれない。

Petite note

編集後記

20世紀最後の今年、財団にとつて設立10年というひとつの区切りを終えることができました。これも皆様のご支援の賜物。来年は気持ちもあらたに21世紀を迎えたいと思います。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

2000年12月発行 Vol. 4 No. 4
 発行人：富永 重厚
 編集人：関 晃典
 発行：笹川日仏財団
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
 TEL：03 (3769) 6252
 FAX：03 (3769) 2090
 E-mail：matsugam@spf.or.jp
 http://www.spf.org/ffjs/

プロジェクト・カレンダ
 2001年1月～3月

1月8日～31日
 《アフィッシュ・フランセーズ》
 ～現代フランスポスター
 50年の歩み
 アフィッシュ・フランセーズ実行委員会
 ／於山梨・白根桃源美術館

2月2日、20日
 《日仏高校生交流》
 ～トゥールーズ・オゼンヌ高校
 生徒が高知へ
 高知日仏協会・東京事務局
 ／於高知南高校

2月6、8、9日
 《パリ・シャトレ劇場
 研修オーディション》
 ～ピアニストと声楽家のための
 劇場滞在型研修
 笹川日仏財団／於大阪・東京

2月7、11日
 《パリ・シャトレ劇場
 マスタークラス》
 ～音楽顧問ヴァタン女史による
 特別クラス
 笹川日仏財団／於大阪・東京

2月中旬
 《日仏美術学生による
 宮沢賢治の世界展》
 ～パリ・イメジフォーラム
 特別展への参加
 京都市立芸術大学
 京都書匠文化研究会／於パリ

3月上旬
 《俳句・和歌による
 フランスと日本の歌曲》
 ～レクチャーとコンサートの開催
 俳句・和歌による二十世紀音楽研究会
 ／於パリ日本文化会館